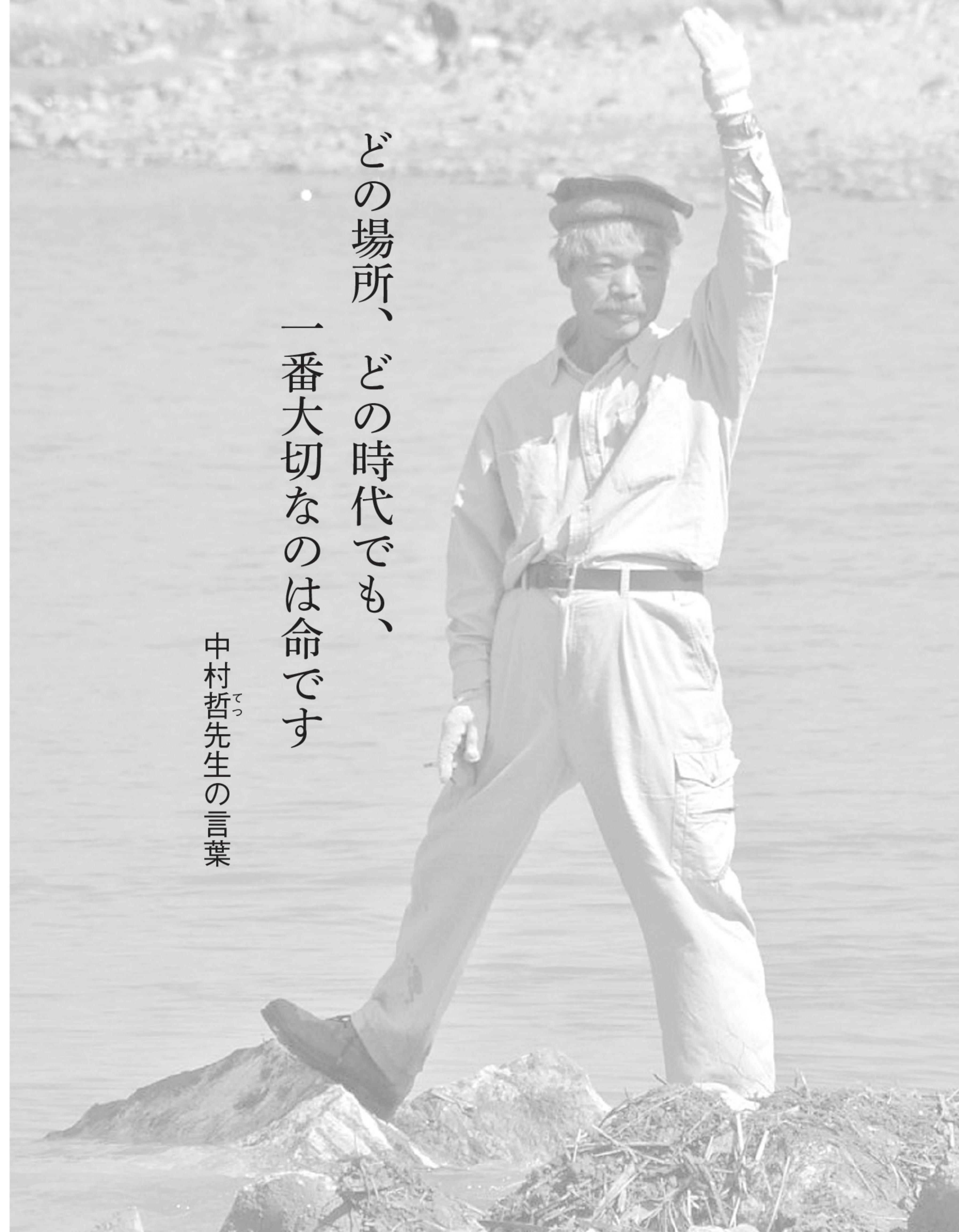


●……もくじ……●

序 章	8
第一章 昆虫博士に憧れた少年	20
第二章 動き出した運命の歯車	40
第三章 ハンセン病と闘う日々	52
第四章 ある患者との出会い	66
第五章 アフガニスタンに診療所を作る	82
第六章 乾ききつた大地 水を求めて	98
第七章 アフガニスタンへの攻撃	112
第八章 緑の大地計画	126
第九章 よみがえる大地	142
●ありのままの中村哲 —中村哲物語・刊行によせて—	174
●中村哲先生のあゆみ	178

どの場所、どの時代でも、
一番大切なのは命です

中村哲先生の言葉





きたのです。

それは、井戸を掘り、水路を作つて、多くの人たちに水を届けたことです。けれど、なぜ、お医者さんが水を届ける必要があつたのでしょうか。

実はアフガニスタンでは2000年に大干ばつが起きました。

干ばつとは、長い間雨が降らなかつたり、雨がとても少ないことによつて起きる、深刻な水不足のことです。

雨が降らない状態が長引けば、地面はカラカラに乾き、ひび割れてしまします。もちろん、

◇井戸を掘り、用水路を作つたお医者さん

この本の主人公、中村哲先生はお医者さんです。哲先生は35年という長い間、日本から遠く離れた、パキスタンやアフガニスタンでたくさんの人の病気を治療し、そして命を救つてきました。お医者さんの仕事といえば、みなさんほどんことを思い浮かべますか。たぶん、患者さんの診察をしたり、治療や手術、薬を出したりといったことを想像した人が多いと思います。

哲先生ももちろん、こうした「ふつうのお医者さん」の仕事をしてきました。けれど、ふつうのお医者さんはまるで違う方法でも、たくさんの人々の命を救つて

序 章





ありのままの中村哲　—中村哲物語・刊行によせて—

ペシャワール会・会長／Peace (Japan) Medical Services P M S 総院長 村上 優

私は中村哲医師の後輩ですが、同世代です。私たちの子どもの頃の伝記で読む医師はシユバイツァー博士か野口英世でした。それを読んで医師を目指す子どもも多くいました。中村が医師を目指すときにも当然、影響を受けたと思います。ともに過酷な世界で働いた医師たちなのですから。ただ、中村の本にあるように常に調和を求めていました。それは人との調和、自然との調和、宗教での調和、文化との調和、貧しさとの調和でした。そこに身を置き、生活し、息をして、あらゆることを受け入れて、そこから共に生きていくとなつたという人生を、伝記として見事にまとめていただきました。細部にも配慮して、しかし事実だけをつなげて、正確に中村の歩みを再現しました。

現されています。この伝記を読んだ子どもたちが大人になつても、違和感のない中村を彼の多くの著書から見つけることができるでしょう。そしてすがすがしい感動と、中村の存在を感じる親しさを覚えるでしょう。将来、ぜひ中村の文章に直接触れていただきたいと期待します。彼の文章はペシャワール会報や活動をつたえる週報など多岐にわたりますが、その文章は美しく、また平和の視線など共感できることが多いと思います。

中村は同輩だけでなく上の人からも、下の人からも「哲ちゃん」と呼ばれて親しまれました。どちらかと言えば寡黙で地味に振る舞う人ですが、なぜか人が集まり、人を引き寄せる魅力がありました。一方、仲間内でみせるユーモアには驚かされます。ハンセン病医療にしても、アフガニスタン山岳無医地区の診療所やそれを支える基地病院の建設、そして井戸や用水路の水事業にしても、日本とは規模の違う自然の中で壮大です。